

トク・ピシン研究小史

A brief history of Tok Pisin studies

岡村 徹

Toru Okamura

帝塚山学院大学

Tezukayama Gakuin University

Abstract: The aim of this paper is to examine a brief history of Tok Pisin studies, one of the national languages of Papua New Guinea. Few attempts have been made thus far to study Japanese contribution to the linguistics of Tok Pisin. The data on which this study is based comes from previous studies with distinguished Japanese linguists. The traditional linguistics of Tok Pisin is discussed in the section dealing with phonology, morphology and syntax. The applied linguistics of Tok Pisin is shown in the section dealing with language teaching, sociolinguistics, comparative linguistics and anthropological linguistics. This study offers the key to an understanding of contact languages spoken in Japan. A desirable contribution of the linguistics of Tok Pisin is examined in Section Four, where it is proposed that Japanese spoken in Melanesia is significant for our understanding of contact language.

Key words: Tok Pisin, traditional linguistics, applied linguistics, language contact

序論

トク・ピシンはパプアニューギニア最大の共通語である。言語名としてはメラネシア・ピジンとも称されるが、この場合、ソロモン諸島やバヌアツ共和国のピジンも含む。他にニューギニア・ピジンとかネオ・メラネシア語といった学術的な言語名も存在するが、現地では単にピジンと呼ばれることが多い。本論文ではトク・ピシンという言語名に統一する¹。

本論文ではまずトク・ピシンをめぐる日本の言語学が、これまで何をどこまで明らかにしてきたのかを概観したい。そしてこのトク・ピシンの研究から、日本の言語学は何を学んだ（学びつつある）のか考察したい。

古くから存在する資料としては、防衛省資料室に保管されている、旧海軍の資料がある（「ピジン英語」（教育 その他五四）。今日ではピジンと表記するのが正式である。これは戦時中に旧海軍嘱託の石川源三によって、手書きで著された。この資料の冒頭に戦史室によって、次のような説明書きがある。要約するとおおよそ次のようになる。この資料は戦時中、米軍によって押収され、しばらくの間、ワシントン郊外のフランコニヤ等の記録保管所に保管されていた。その後、日本政府の返還要求に応じ、昭和三十三年三月に日本へ返還された。防衛研修所戦史

室には横浜経由で翌月に届けられ保管されたとある（上記資料）。

この資料の構成は、第一編が単語集に当てられ、数字や曜日など、全部で232の数の語彙が含まれている。今日なら使用できない「土人」ということばが見られるが、いかにも1940年代に書かれたものといった印象を受ける。また陸海軍に関係する単語も、数多く含まれている。

次の第二編は会話文（当該書では会話用単文）に当てられている。先の単語編と同じく、現地パプアニューギニアで、旧軍の作戦上必要な表現が数多く見出せる。全部で617例ある。

これよりも古い時期に編集された資料が存在するかもしれない。例えば主に20世紀初頭にコブラ農園の経営や造船業などを手がけた神戸の南洋産業会社が頻繁にニューギニアに出かけている（岩本 1995）。しかし言語資料までは見つかっていない。

そこで手始めに、日本国内で規模の大きい学会として知られる、日本言語学会が発行する、『言語研究』という学術誌のページをめくってみたい（以下に示す、報告の年代とタイトルは「全号目次と電子版閲覧2010」を参照した）。これは、1939年1月に創刊された、言語学の学術誌である。初代会長は新村出、当時の論文執筆者として、柳田國男や泉井久之助ら蒼々たるメンバーが名を連ねている。

ニューギニアの言語について、最初にまとまった報告をしたのは浅井恵倫だと思われる。報告のタイトルは、「ニュー・ギニア原住民の生活と言語」（1965年）である。1973年には、江実が「ニューギニアのNAN語について」と題して報告している。1985年には、崎山理が「語順が変わる原理——ニューギニアのオーストロネシア語の場合」として報告している。近年では、千田（2000）が「ドム語のトーン」、佐藤（2003）が「コーヴェ語の属性名詞——「いつも」、「しばしば」を表す表現——」、柳田（2004）が「アタ語の独立代名詞の非単数表示と統語機能について」、千田（2006）が「ことばが分ける二つ、組合せる二つ——ドム語——」等の研究発表を行っている。

ピジン語についての報告は、1977年に、Hiroshi KukiとMasanori Yoshiokaが、メラネシア・ピジンの一つ、ビズラマ語の紹介をしているのが最初であろう。ビズラマ語はバヌアツ共和国で話されている共通語であり、その成立の背景、音韻、形態、統語について英文で報告している。

しかし同じメラネシアのピジンの一つである、パプアニューギニアのトク・ピシンについての報告になると、1987年まで待たねばならない。これは意外にも筆者が行った報告が最初のようなのである。題目は、「トク・ピシン語の前置詞longの省略機能について」であり、井上（1999）がこれに続く。タイトルは、「トク・ピシンにおける限定・逆説的表現について——語用論的考察——」。1990年になると、「ピジン・クリオールをめぐる連続リレー講演」が東京大学で開催された。講演者は、土田滋、西光義弘、崎山理、細川弘明、西江雅之である。これをもって、日本におけるピジンとクレオールの研究が確立されたという必要はないが、日本言語学会をは

じめ、隣接する諸学会に広くその重要性を伝達した功績は大きいと言えるだろう。

1. トク・ピシン研究の普及と定着の過程

今日では、多くの研究者が分野を問わず、ピジンという概念を理解しているし、一般人にも知られるようになってきた。いったいつ頃から、一般人にも、知られるようになったのか。

1つの判断の材料として、比較的、大衆的な性格を有している言語の雑誌を用いると良いかもしれない。例えば、大修館書店発行の『月刊言語』は、1972年4月に創刊された言語学の雑誌である。最初にピジンという術語が見られるようになったのは、その創刊から3年後の1975年のことである（以下、出版年と小論のタイトルを本文中に記す）。アフリカをフィールドとする、西江が、「共通語、ピジン、クレオール」というタイトルで小論を書いている。

ニューギニアのピジンについては、1980年に、太宰が世界の新聞を紹介する欄で、ニューギニアのピジン語紙であるワントク新聞を紹介している。その後、1985年には特集が組まれた（「特集・ピジンとクレオール」）。この特集が組まれる前に、西光（1982）と笈（1983）がビッカートのバイオプログラム理論を紹介しているので、注目を浴びる下地がこのときすでにあったと言ってよい。さらに1988年には、特集「外国語と私」の中で、桜井隆がピジン語を取り上げている。1995年には、一般読者向けの「チャレンジコーナー」で田中幸子がピジン語の文法等の問題を出題し、1997年には、国立大学の大学院の試験で、ピジンとクレオールの違いを説明させる問題が出題されている。2002年には、崎山理がピジン語の言葉遊びについての論考を取り上げている。本格的な論文も1999年に取り上げられた。フィールドを知り尽くす紙村徹が「パプアニューギニアにおける多言語状態と共通語」と題して、人類学の視点から考察している。

ここに取り上げるスペースがないが、ニューギニアのピジン以外でも、アフリカンス語、ハワイの日本語、アフリカのクリオ語、黒人英語、スワヒリ語、ハイチ・クレオール語、トレス海峡諸島のピジン、ハワイ・ピジン、ギニア・ビサウのクリオール語、ニカラグアのクレオール手話、さらにピジンからクレオールへの進化についての言及もなされた小論も掲載されていることを付け加えておきたい。

特に、1980年代においては、ビッカートのバイオプログラム理論が紹介されたこともあって、日本においても言語学のさまざまな分野の専門家が関心を寄せた。1970年代は、世界中のピジンやクレオールの記述的な研究が中心であったように思う。この作業があったからこそ、ビッカートの言語理論が誕生したと言っても過言ではない。ビッカートンがハワイと中南米の接触言語を比較し、構造的な類似性を見出すことができたのは、まさに、これら1970年代の成果があつたことである。

次に、研究論文を調べてみたい。Ciniiで「ピジン」という術語を検索してみると、全部で94点の論文がヒットした（2013年8月現在）。これを年代別に観察すると、年々ピジンとクレオールの研究論文が増えていることがわかる。2010年代は前半途中ですでに17点あるので、2000年代のそれを確実に超えると思われる。ちなみに、ニューギニア関係の論文では、中野道雄が1976年に執筆した、『ニューギニア・ピジンの輪郭』が最初であると思われる。

表1 研究論文数の推移

年代	論文数
1970年代	4本
1980年代	10本
1990年代	16本
2000年代	47本
2010年代	17本

研究対象となっている言語は様々にある。タイトルから、トク・ピジンに関する研究論文が全体の中で、どのくらいあるのかを調べてみたい。一番多いタイプは、「ピジンとクレオール」、「ピジン・クレオール研究史」のように、特定の言語の記述的研究を目的としないものである。これは37本ある。

次に多いのが、横浜、浜松、満州、サハリン、中国、台湾など日本人との接触を扱った研究論文が21本あった。さらにハワイのピジンが11本、ニューギニアのピジンが10本、バヌアツのピジンが6本、ソロモンのピジンが3本、ナウルが2本、その他9本となっている。ハワイやニューギニアのピジンは、上記の個別言語の記述を目的としない論文の中で取り上げられることが多いことを考えると、この2言語は日本人に最もよく知られたピジンということになる。

ピジンが言語学者に注目されるのは、その発展の様子が成立当初から記録され、観察が可能だからである。特に、言語接触論、言語変化論、言語獲得論などに寄与する。

今日では、人類学、社会学、観光学、文学など多くの学問分野でこの用語の使用が認められる。学問分野によって、多少、用語の使い方に相違はあるものの、この用語が学際的な意味において益々その重要性を増していることは事実である

それでは、次の第2節と3節で研究の流れを細かく観察する。

2. 伝統的言語学の視点から

2.1 音韻

トク・ピシンの音韻については、欧米の学者が調査したものを紹介したもの（田中 1984）や、新英語の特徴との関連性に言及したものや、標準英語との対比から、当該言語の特徴を見出しそうとしたもの（杉本 2008, Okamoto 1996）などがある。

このうち、標準英語との対比を通じてトク・ピシンの音韻を分類し、その性質を明らかにした、杉本（2008）の研究を取り上げたい。

杉本はオンライン上の語彙リスト等、約4000語を対象に、その音韻やつづり字を分類・分析した。考察の対象として、音素の単純化・脱落を反映するもの、子音音素の代用・変化、同化、二重母音の単母音化、母音挿入、子音挿入、音節挿入の事例を調べ、それをつづり字法の問題と絡めて、その特徴を浮き彫りにした。その結果、トク・ピシンはつづり字法の単純化が多く見られること、そして、その背景的な要因として、「[発音至上主義]ともいえるトク・ピシンのつづり字法の合理性」(p. 126)があるとした。つまり、トク・ピシンが発音にきわめて忠実なつづり字法を採用していると述べているのである。さらに「標準英語に見られる発音とつづり字法の複雑かつ不合理な関係をことごとく解消し、トク・ピシンの使用者学習者にとって分かりやすく使いやすいつづり字法が随所に見られる」(pp. 188-189)と結論づけている²。豊富な用例を基に、緻密な分析を試みている。

ところで、杉本氏の論文の117頁から142頁までの間に、「単純化」という概念が11回、「合理性」が10回出現する。この二つのキーワードは、接触言語の研究において重要である。ただトク・ピシンを使ってメディアに情報発信していく際、都会と地方とで情報の共有に差が生じている現状がある。

例えば、エイズの情報一つとっても、rural pidginの話者（約80%）にとっては、どんなに発音やつづり字が単純化され、その結果合理性を有したとしても、正しく情報は共有されないのである。この点については、rural pidginの話者に配慮した表現装置が必要になってくる。

2.2 形態

重複の研究は、語形成の仕方や、その機能や意味を考察するものまでである。

Okamoto (2009) は、Mihalic (1983) らの辞書を使って、トク・ピシンの重複法の機能と意味について考察した。その結果、トク・ピシンはさまざまな機能と意味を有していることが理解できるが、特に‘強調’という概念が中核にあるとした。例えば、harim ‘to hear’, harharim ‘to listen intensely’, sutim ‘to shoot’, sutsutim ‘to shoot violently’。そして、語彙化した重複語ばかりでなく、機能的・意味的な重複法においてもガゼレ半島のことば、つ

まりトライ語の影響が大きいとした (p. 260)。基本的には基層説の立場をとっている。

筆者も基本的には基層語理論が根幹としてあって、しかしそれだけでは説明できないため、普遍性理論や語彙入れ替え説も補足的に加わるのではないかと考えている。トク・ピシンもトライ語も、強調性、複数性、配分性、継続性の機能が存在する。これはトク・ピシンが重複現象の性質をトライ語から受け継いだものと考えることができよう。しかし名詞化および自動詞化する際、重複という手法を用いるのは、トライ語のほうにしか備わっていない。これは多くのトク・ピシンの話し手にとって、母語にはない特徴である可能性が高く、接触の際、切り捨てられたと考えてもよからう。実際、この二つの特徴は前者の特徴と比べ、多くの在来語に備わっているわけではない。したがってここでは、普遍性理論および語彙入れ替え説はあまり関与していないのではないかと考えられる。むしろ、単に有標部分を切り捨てたと考えるほうが妥当性がある。

Nose (2011) は、ニューギニアのマダンにあるセイン村で行ったフィールドワークを基に、トク・ピシンの重複法の形式・機能・用法について調査した。加えて文法書や聖書なども資料とした。

その結果、トク・ピシンの重複は、決して生産的であるとはいえないとした。またトク・ピシンの重複語の多くが、英語基盤の動詞を使って、語彙を重複化させ、それらに新しい意味を与えていると述べている。ただし重複化された結果の産物自体は英語には見られないし、もちろんその機能的な面も英語にはないと指摘した (p. 69)。

この点については筆者も同感である。多くの接触言語が上層語にもなければ基層語にもない特徴を示す。トク・ピシンもそのような言語の一つにすぎないのであろう。トク・ピシンの語彙層の約10%を提供するトライ語は必ずしもトク・ピシンの重複と1対1の対応を見せないが、根幹的な部分はトライ語の特徴を受け継いでいると筆者は考えている。言語類型論の専門家でもある、野瀬氏なら、きっとこの現象をめぐって言語をタイプに分類し、トク・ピシンを正しく位置づけてくれることだろう。

一方、重複現象とは異なる、繰り返し現象については在来の言語からの借用が多いと報告した。重複と繰り返しは、その使い方や文法的な機能が異なると主張している。つまり形態論的な特徴と語彙基盤が、双方異なっているとしている (p. 69)。

また野瀬氏は、“There is no reliable and comprehensive study of reduplication in Tok Pisin, although previous studies (Crowley et al. 1995, Siegel 2008) showed some reduplication examples in Tok Pisin.” (pp. 62-63) としているが、実はMühlhäusler (1975) が学術誌 *Kivung* に Reduplication and Repetition in New Guinea Pidgin を発表している。これはトク・ピシンの重複現象について包括的な研究を行ったことでよく知られている。従来のスケッチ的な記録とは違って、豊富な用例を基に、実証的・理論的にトク・ピシンの重複法を探究している。

これ以降の重複法に関する研究は、その多くがMühlhäuslerの成果を基に、研究を展開・派生させている。

2.3 統語

文法的な記述は比較的多い。その中でも、宮・中野（1979）の研究は、特に信頼できる。宮氏は戦時中ニューギニアで通訳の経験があり、中野氏は本書で理論的説明を試みている。名詞・代名詞、動詞・助動詞、文型、“i”、形容詞、前置詞、副詞、疑問文・命令文、接続詞の説明に加え、音声や文字・表記に関する情報も含まれている。さらに資料や語彙に関する情報、加えて他の研究書の紹介と批評もある。1970年代に出版されたとはいえ、今日でも利便性と通用性が高い研究書である。トク・ピシンの文法の全体像を知ることのできる良書である。

中野氏はこれ以外にも、「ニューギニア・ピジンの類型」（1977年）、「ニューギニア・ピジンの輪郭」（1976年）、「トク・ピシン七つの試練」（1990）の中でも、若干の文法的考察を行っている。

田中（1986）は、トク・ピシンの複文を記述した。従属接続詞、名詞句補文、動詞句補文の三つの角度から検討がなされた。

例えば、英語とトク・ピシンを比較し、名詞句補文の構造は異なるが、どちらも同じ意味が伝えられるような体系を持っているとした。英語では下線部が関係詞になるのであるが、トク・ピシンには*i*という述部標識があるために、関係詞が存在しなくても情報が失われる恐れがないとした（p. 81）。

(1) I know *the man* [the man ⇨ *who* has a red book]. 田中（1986：81）

(2) Mi save dispela man [dispela man ϕ ⇨ *i* gat wangepela retpela buk.

田中（1986：81）

従来、言語学者によって軽視された歴史をもつ、ピジンにも自然言語と同じような複文が存在することを言語学的に明らかにした。そして、トク・ピシンは体系性を備えた言語として、立派にその機能を果たしているという論調で締めくくっている。

岡村（2013）は、ニューギニアの高地のフィマ村で、トク・ピシンの無生物主語構文を研究した。その結果、OV型言語話者が無生物主語を用いた文を愛用文型とし、VO型言語話者が生物主語の文を選好する傾向があると指摘した。次に無生物主語構文は、[+Controllable], [-Power]の意味素性のときに成立しにくいことが指摘された。また新聞の政治・経済欄のほうが物語文より名詞句階層に即しているとした。さらにトク・ピシンのゼロ範疇詞に関しては、譲渡不可能所有物に近い名詞類の許容度が高いことを指摘した。

他にも、連続動詞構文の研究をした、福田（2004）やピジン英語の現状と今後の課題について研究した中尾（2010）らの研究がある。

2.4 意味

黒澤（2006）は、メタファーを翻刻する際、その意味の理解が容易な場合とそうでない場合とがあり、文化によって規定されているとした。

都市部で用いられるメタファーは、地方のそれと異なる。都市部では、英語から多くの語彙がトク・ピシンに流入し、次々に新しい表現が生まれる。当然、村落住民はそれらに対する理解が不十分になる。都市部住民は村落のコードを符号化できるが、その逆は成立しない（p. 61）。したがってメタファーの理解には、当該文化・社会の理解が欠かせない。

トク・ピシンの用例としては、身体部位のbel（腹）を使って分析を試みている。「腹」は、「パプアニューギニアの文化そのものであり、パプアニューギニア人はあらゆる決定が腹の中でなされると考えている」（p. 60、訳および下線は筆者）と述べている。

崎山（2003）も、パプア諸語における、非言語表現は多彩で、民族的な差異が著しいと述べ、「トク・ピシンの中に取り込まれる身ぶり言葉は、個々の民族的事例からフィルターを通して定着する」（p. 53）、とした。そのうえで、「腹」に関する、多くのイディオムも取り上げている。また身体部位以外の文化的行動からも比喩的な表現が生まれるとし、kakoと呼ばれる積荷信仰に由来する表現を挙げている（p. 54）。「腹」については、黒澤の述べるようにパプアニューギニア人の伝統的価値観・思考様式に由来し、カーゴカルトについては欧米人との接触が本格化してから生じた表現であると思われる。

実は、筆者も2006年に、イディオムの凍結性について議論している。上記の身体部位を使った慣用句に表層変形を適用し、イディオム性について考察した。

トク・ピシンのメタファーは語彙を標準英語から借用するが、土地住民の感情によって表される。またメタファーを符号化するか否かは、黒澤（2006）によると、当該社会の連帯の強弱によって左右されるとある（p. 61）。

たしかに都市文化と村落文化は異なる。後述する紙村（2010）にもあるように、オーストラリアは地方に対しては「ほったらかし」政策、都市部に対しては、特に白人居住者への手厚い「優遇」政策を展開している（p. 109）。そのような状況では、メタファーの成立の背景および形成の方法が異なってくるであろう。その結果、村落住民が理解できない、メタファーが大量生産されることになる。無論、実際のコミュニケーションの場では、互いの文化保持者の歩み寄り（accommodation）が見られるので、意味を理解するための調整は可能である。ただ、これが新聞やラジオといったメディアになると、コミュニケーションが一方通行なので、問題が生じる。

次の第3節では、応用言語学的な側面に焦点を当てる。

3. 応用言語学の視点から

3.1 言語教育

吉田 (2005) は、パプアニューギニアの教育制度や言語教育の現状を視察し、特に前期初等教育 (9~11才) において実施されている、移行型バイリンガル教育について調べた。その結果、次のような結論に至っている。

コミュニティー語 (日本での国語にあたる) を用いて、生徒が自分の情緒的知的レベルにあった問題解決能力を身につけ、創造的言語活動を行うことにより、豊富な知識を獲得できることを確認し、それを基盤として、英語 (日本では外国語) による問題解決能力を身につけさせ、創造的言語活動を行えるように徐々に指導していく方法は大いに参考にすべきであると考えられる。(p. 155)

このように国語力の定着の徹底化をはかったうえで英語学習をスタートさせるという考えは我が国の言語教育のあり方を考えるうえでも参考になる。ニューギニアという多言語社会に目を向け、日本国内の言語教育のあり方を考える著者の着想は評価に値する。筆者の目にはニューギニアが言語教育の1つの広大な実験場のように見える。上記の考え方は、従来の初等前教育における反省がある。つまり、「個々のコミュニティー語、またはピジン語で学習活動を行ってきた生徒が、初等教育に進んだ途端に公用語である英語での教育を受けた場合、苦痛や混乱を伴い、教育的にも効果が低い」(p. 147) という体験をパプアニューギニアがしたためである。徐々にコミュニティー語 (おそらくトク・ピシンも含む) の使用を減少させていく方策が試験的に試されているのである。ただ語学学習における、教育言語としてのトク・ピシンの位置づけが上記に示されていないのが残念ではある。

高殿 (1988) のことばを借りれば、「パプアニューギニアにとり、トク・ピシンは国民としてのアイデンティティを形成する重要なシンボル」(p. 231) あるいは、「トク・ピシンは全域で通用する共通語としての機能のゆえに、新生国家のナショナル・アイデンティティの確立には不可欠の言語」(p. 232) となる。このような高い評価を持つ言語を教育の現場でどのように活用したらよいのか。前期初等教育において、徐々に英語に移行させていくにしても、トク・ピシンとの併用をどう考えるか、英語教育に携わる者は皆、回避できない問題である。

筆者は、上記の移行型バイリンガル教育に賛成である。その際、教育言語については、地域の実情に合せた、柔軟なプログラムがあってもよいと考える。例えば、ポートモレスビーではトク・ピシンの他にも、ヒリ・モツ語という共通語がある。在来語やヒリ・モツ語から徐々に英語へと移行していくプログラムがあっても良い。トク・ピシンの勢力の弱いところでは、在来語の比重を大きくし、それから英語へと徐々に移行する。外国人が多く暮らす都市部では、英語への移行時期が少し早くても構わないと考える。ただし移行型バイリンガル教育の根幹は

崩してはならないであろう。

ここで問題になるのが、パプアニューギニアの場合、教育言語の問題以上に、「教育の地域的不均衡による都市と農村の格差の助長、教育を受けたものと、そうでないものとの階層的格差の拡大などの危険性が懸念される」(高殿 1988: 235) という問題である。だからこそ、移行型バイリンガル教育の根幹を崩してはならないのである。高殿 (1988) は英語とトク・ピシンの関係について、次のようにも述べている。「英語に部族間住民意識を超えて、国民として統合していく結束力が望めるのであろうか。(中略)むしろ、住民の支持で拡大し、強い凝縮性を持つトク・ピシンにこそ、その力が期待できるのではないだろうか」(p. 233)。

これは必ずしも、前期初等教育における英語教育について言及したものではない。一方で、トク・ピシンが在来の言語を駆逐しているという報告も多々ある³が、この点についてわれわれはどう考えるべきか。トク・ピシンを象徴化するあまり、伝統的かつ平等な世界が崩壊する危機が高まる可能性がある。同時に、何かを象徴化するということは、新たに言語の階層を生む危険性もある。平等を重んじる単層社会に暮らしてきた、現地住民の間で不平等感が増長されるのであれば軽視できない問題になる。多様性の消失は文化の消失であるというふうに、多様性を尊重するならば、在来言語を視野に入れたトク・ピシンの象徴化を考える必要がある。多様性こそが3万年の伝統を可能にしたことを考えると、放置できない問題である。繰り返しになるが、パプアニューギニアの言語教育は、地域の言語状況を考慮した、移行型バイリンガル教育が望ましいと考える。

他にも、トク・ピシンとエスペラントの簡潔性を国際補助語としての英語教育から観察した、森住 (1989) の研究がある。

3.2 文化人類学

ニューギニアは1975年にオーストラリアから独立したが、独立とは名ばかりで、旧宗主国から完全に独立しているとは言えないという論調が文化人類学者の論文に多く見られる。

例えば、豊田 (2000) は、トク・ピシンが、植民地主義的な性格も、反植民地主義的な性格も持ちあわせていることを示した。現地語とトク・ピシンの二項対立は、英語が普及している時代と普及していない時代とでその性格が変わる。

後者の場合、「メラネシア・ピジンはあくまで現地語と対照され、現地語が「土着」、「伝統」などの概念と結びつくのに対して、メラネシア・ピジンは植民地主義的な性格を示す」(p. 165)。前者の場合、「英語はヨーロッパ人、西洋、近代と結びつき、きわめて強い植民地主義的な性格を持っているので、これに対するメラネシア・ピジンは、英語との対照性故に反植民地主義的な性格を示す」(pp. 165-166)。したがってこの場合には、トク・ピシンは、パプアニューギニア人のアイデンティティを確立する言語となるのである。

ニューギニア人の言語行動はカーゴカルトが関係しているように思える。白人の信仰する宗教を自分達も信仰することによって、白人のようになれる、という発想があった。近代化の象徴として捉えられた。トク・ピシンを獲得し雄弁になることは、ヨーロッパ人に近づけると同時に、村での社会的地位を上昇させたのである。

パプアニューギニア人は、トク・ピシンを話すことにより、自らを英語や独語を話す外国人と差異化し、国家を意識できることも学んだ。このことは、パプアニューギニア都市周辺村落で、現代音楽の聴取をし、さらに民衆の意識を探った、諏訪（2005）の論文で確認できる。下記の引用にあるように、コンサートで催される音楽が、自分の国家を意識する場となっていると言えるかもしれない。

自分が存在する音楽の場所である甘美なロコル歌謡の世界への期待に胸を膨らませて待っている場所にホワイトマンの歌が鳴り響くとき、快楽の場から聴衆は切り離されてしまう。そこで歌われる英語のアクセントの中に文化的他者の声を聞き取った聴衆は罵声を浴びせ、石やビール瓶を投げ、音源に妨害と破壊を試みる。(p. 140)

独立したとは言え、700を超える部族社会の構成員が、国家の意識をどれほど有しているかは疑問である。パプアニューギニア人がパプアニューギニア国の一員であるというアイデンティティを確立するのは、現在でもニューギニアの重要な課題である。トク・ピシンを使うことで、パプアニューギニア人は二つの種類のアイデンティティを獲得することがわかった。

紙村（2012）は、人々が「国家」なるものをどのように理解し認識しているのかを、いわゆる「国語」問題とからめつつ考察した。オーストラリアの無償援助を中心とした、国外からの援助金に頼る体質は今日でも受け継がれており、「村落住民にとっては、「国家」とは一方的に自分達に資金を贈与してくれる存在」（p. 119）と紙村は考える。したがってトク・ピシンのレベルにおいては、それが、一方的にオーストラリアから贈与されたものと捉えることによって、自らの欲望を構造化できると考える（p. 127）。紙村は、「パプアニューギニアの独立とは名ばかりで、とどのつまりはオーストラリアによるパプアニューギニアの間接統治という「新植民地主義」的な政策」（p. 117）であると結論づけている。トク・ピシンを媒介することによって、かれらは「国家」的なものを想像する。ただそれは、すべての部族社会を固定的に類型化できるものではなかろう。

3.3 社会言語学

岡村（2013）は、ニューギニアのフィマ村で話されているトク・ピシンのポライトネスについて研究した。

その結果、最も丁寧な依頼表現は、聞き手が教師、旅行者、近隣の村びと、ソマレ元首相、

ビックマン（政治的リーダー）のときに、比較的、固定的に使われているのに対し、女子の場合のそれは一貫性がないことがわかった。日常生活における様々な交渉事は、主に男子が行う。それが成功するかしないかは非常に緊張を強いられる。この交渉を成功に導かねばならないという圧力が男子の中で多様な依頼表現を生んだとする。一方、女子のほうにはそのようなプレッシャーがないため、依頼表現の使用に一貫性がないとした。

また依頼表現の出現の分布は、学歴という社会的属性が要因になりうることを実証した。さらに全般的に、[-近接性] という意味素性が、換言するならば、ウチとソトの関係におけるソトに対して、この最も丁寧な依頼表現が生じやすいことも突き止められた。岡村の研究は、地域固有の文化を考慮しなければ依頼表現の出現を正しく分析できないことを示している。

トク・ピシンを、バヌアツ共和国のビズラマと比較し、社会言語学的な考察を行った研究者もいる。野瀬（2008）によると、「トク・ピシンがクレオールとして着実にその話者を増やしている一方、バヌアツでは首都であるポートビラで生まれた子どもに限られる」（p. 106）ということを明らかにした。たしかにトク・ピシンは在来の言語を駆逐する勢いで、その使用範囲を広げている。一方、ビズラマ語のクレオール化がトク・ピシンにおけるそれと比べてその進行が遅いのはなぜか、具体的な理由がほしいところである。例えば、ニューギニアにおけるように、カーゴカルトといった概念が関与しているのかなど。

さらに、「外国人が少しでもクレオールを話した場合、喜んでくれた」（p. 105）と述べているが、これについては、筆者も同感である。しかし、豊田（2000）が、「現地のエリートは、むしろ英語への親近感を示すことで、自分のエリートとしての地位を確認するという傾向があり、そのためメラネシア・ピジンを軽蔑さえする傾向がある」（p. 168）と述べているように、旧宗主国の価値観を植えつけられたエリート存在もいるので、ニューギニア人の意識を一般化するのには難しい面もあることに注意しなければならない。

言語的な階層が生じるのは、回避できないことであるが、筆者は、その階層の捉え方も地域の実情に応じた、多様な解釈があつて良いと考える。そもそも言語の階層を、画一的・静的な実態として捉えることは、言語資源の保持という観点からはデメリットが大きい。皮肉にも、パプアニューギニア人の国家意識が希薄であることが、幸いしているのかもしれない。

3.4 比較言語学

崎山（1991）は、「日本語の系統を考える際、日本語が文法部分においてもいくつかの言語要素がまざりあつて形成されている混合言語とみる前提が必要である」（p. 236）と述べている。近代においてニューギニアで観察可能なトク・ピシンは、トライ語と英語の二つの言語から文法装置を取り込んでいると考えている。具体的な例として、Em i bin go. (He went.) を挙げ、i は主語と述語を結びつける連結辞であると述べている（p. 233）。これはメラネシア的な文法

装置である。残りの語彙はすべて英語由来である。

かつて橋本（1985）は、北方民族の南下侵入が繰り返しおこなわれたことによってピジン化およびクレオール化したことが中国語の成立の背景に関係していると主張したことがある。しかし多くの中国人学者から冷ややかな目で見られたと回想している（pp. 80-81）。おそらく当時の日本国内における反応も、中国ほどの反発はなかったであろうが、決して全面的に受け入れられるというものではなかったであろう。また今日でも言語類型論者からは、言語のクレオール化説に対して、それは系統論から目を背けるものとの反応もなきにしもあらずだが、筆者は橋本や崎山の考えを支持する。日本語を混合言語と見なければ、どうしても説明がつかないからである。打開策の1つとして、1980年代に提唱された、ピッカートンのバイオプログラム理論のさらなる理論化が欠かせないと考える。また、海を渡った日本語の資料からの考察も有効な時期に来ているかもしれない。

筆者も、かつて上記の連結辞を対象を絞り、トライ語とトク・ピシンの対照言語学的な考察を行ったことがある。例えば、述部が述語形容詞のとき、両言語とも連結辞が使われるが、述語名詞のときはトライ語の場合、それが欠落する。両言語は必ずしも1対1の対応を見せないが、トク・ピシンの文法体系の根幹的な部分にはメラネシア的な要素が備わっている。こうした、記述的な研究を重ねていくことが理論の構築に必要であることは言うまでもない。

4. 今後の課題

これまで主として、日本人言語学者のピジン・クレオール研究を私見を交えながら概観すると同時に、その時代的な意義についても考察してきた⁴。本論文で取り上げることはできなかったが、他にも「ピジン」の語源をめぐる研究などがある⁵。これまでの議論で明らかであるが、日本におけるトク・ピシン研究はその質においても量においても世界に引けを取らない。このような状況を、20年前に誰が予測できたであろうか。従来の研究は、1冊どころか、3巻本のセットにできそうなくらいまとまったものになっている。

さて、最後に、日本の言語学がピジン・クレオール研究を通して、今後特になすべきことを述べたい。私の考えでは、少なくとも三つの主要なテーマがある。それぞれ、「海外で話されている日本語の研究」「地域方言の衰退に関する研究」「日本語の系統」である。

これらの研究で得られた知見を国内における言語接触現象や海外で話されている（あるいは話されていた）日本語の研究に繋げていく必要がある。特に、日本語が話されている地域は異なっても（当然、基層語が異なっても）、共通の文法特徴が備わっているとしたり、かつてピッカートンが提唱したような言語理論が浮上もするし検証されることにもなる。

海外で話されている日本語の研究も、日本列島周辺、ハワイ、ミクロネシア、ブラジル、カ

ナダなど多岐にわたっており、データの蓄積もある。例えば、それぞれの地域で話されている日本語の特徴は、初期移住者の使用した言語（方言）特徴が中核をなす⁶という学説がある。ハワイやミクロネシアではこの学説がある程度当てはまるであろう。また筆者もしばしば陸の孤島と呼ばれる熊本の国立療養所菊池恵楓園で同様の観察を行ったことがある。入所者は全国から集まるが、対格助詞「ば」の分析を通じて、肥筑方言を中核とした、ことば世界が療養所内に広がっていることを示した⁷。日本語研究からの理論の構築も十分可能な時期にきている。

次に、トク・ピシンが在来の言語を駆逐していく様子は、言語（方言）の衰退に関する理論的研究に寄与すると思われる。それはちょうど日本において、共通語が地域方言に影響を与える様子とよく似ている。ニューギニアの場合、トク・ピシンが使用できないと、就職の機会が減少したり、部族間の交易がうまくいかず、結果的に村に不利益をもたらすといった経済的なファクターが関係してくる。また村のリーダー的な存在というのは、トク・ピシンを話すことができ、かつ、雄弁でなければならない。在来語離れが若年層を中心に拡大しているのは、上記のような理由があるためである。そのため、在来語はお年寄りのことばというふうに解釈されるのである。またトク・ピシンの中でも、例えば未来をあらわす *bambai* は年配層と結びつき、*bai* は若年層と相性が良い傾向にある。私の調査地ゴロカでも、*bambai* は年配層の一部がよく使う。

似たようなことは日本国内のどの方言でも起きうる。特に、いわゆる琉球文化圏では歴史的に祖国復帰を果たすべく、ことばの面でも著しく共通語化が進んだ。他の地域方言も程度の差はあれ、共通語化が進行している。どのような語彙が保持され、どのような語彙が共通語化するかについては、トク・ピシンの事例から我々が知ることのできる部分もあろう。人は移動する存在である。筆者も博多方言の福岡県離島への浸透の度合いを調査したことがある。その結果、人の移動が少なく、つまり、接触頻度が小さければ小さいほど伝統的な博多方言が保持されやすいと結論づけた⁸。パプアニューギニアはまさに言語の実験場である。

最後に、再び、日本語の系統論に話を戻す。トク・ピシンが二つの言語、すなわちトライ語を中心としたメラネシア系の言語と英語から文法装置を受け入れていること、語彙層の約80%は英語であるが、残りは約10%の土着語と5%のドイツ語の語彙から成っていることなどは、日本語の大陸的・南方的要素を考察するうえで有益である。成立してわずか100年強の言語の研究から、万年という単位が経過している日本語の過去の姿を描き出すことは決して不可能なことではないであろう。

太平洋の孤島で話されているナウル共和国のピジンも中国大陸からナウル島へ運ばれ、そこでオーストロネシア系の言語やメラネシア系の他のピジンの影響を受けながら、今日社会的に機能している。この言語が将来、公式に言語名を獲得し、さらに時間が経過したとき、この言語の系統を議論するのは比較的容易なことかもしれない。

注

- 1 ただし先行研究を引用するときはそこで用いられている表記に従う。これはクレオールという用語についても同様である。本論文ではクレオールで統一する。文中に筆者とあるのは私のことである。
- 2 最近の表記に関する研究としては、千田（2006）がある。千田はトク・ピシンの表記について、その実態と問題点を考察し、表語文字による表記が可能かどうか検討している。
- 3 崎山（2003：11）は、トク・ピシンのクレオール化で、1千数百人規模の話者を有する、ムリク語を話す若者が減少し、消滅の危機に瀕していることを報告している。
- 4 欧米の言語学者を扱った、研究史としては林（1987）に詳しく取り上げられている。「ピジン・クレオール研究の父」と称される、シューハルトからピッカートンに至るまでの影響力のあった、言語学者の研究の流れが紹介されている。本論文と比較して読むと興味深い。また増田（1998）には、そのバイオプログラム理論、基層語理論、コンプリメンタリー仮説など、クレオール言語学の重要な理論の概説があり、同時にこれまで功績のあった研究者の紹介もしている。
- 5 林（1981）は、英語のbusinessに由来するとする「ビジネス説」や南米の北東部の在来言語に由来するとする「ピジャン説」ほかを取り上げ、音変化や意味の問題を考察している。
- 6 松本和子「パラオ日本語の語用論的変異と変化」岡村徹 / Apoi Yarapea（編）『オセアニアの言語的世界』溪水社 2013年 p. 249.
- 7 岡村徹「集団語の研究——菊池恵楓園の場合——」『帝塚山学院大学研究論集』第43集 2008年 p. 118.
- 8 岡村徹「博多弁と福岡県離島の関係——能古弁におけるコイナー化の可能性——」『帝塚山学院大学研究論集』第42集 pp. 41-57.

参考文献

- 岩本洋光（1995）「太平洋戦争以前のパプア及びニューギニアへの日本人出稼ぎ移民——「南進論」と「白濠主義」の間に生きた人々——」『移民研究年報』創刊号、日本移民学会。
- 岡村徹（2007）「博多弁と福岡県離島の関係——能古弁におけるコイナー化の可能性——」『帝塚山学院大学研究論集』第42集 pp. 41-57.
- 岡村徹（2008）「集団語の研究——菊池恵楓園の場合——」『帝塚山学院大学研究論集』第43集 pp. 103-120.
- 岡村徹（2008）「イディオムの凍結性について——ニューギニアのトクピシンを中心に——」

- 『アジア英語研究』第10号 日本「アジア英語」学会 pp. 125-147.
- 岡村徹 (2013) 「ピジン語のポライトネスとホワイト・マン」オーストラリア学会編集『オーストラリア研究』第26号 pp. 24-36.
- 岡村徹 (2013) 「トク・ピシンの無生物主語構文」岡村徹 / Apoi Yarapea (編) 『オセアニアの言語的世界』溪水社 pp. 98-131.
- Okamoto, Makoto. (1996) Some English-influenced Pronunciations Characteristic of New Guinea Pidgin and Their Orthography. 『駒澤短期大学研究紀要』第24号 pp. 47-65.
- Okamoto, Makoto. (2009) Reduplication as the formation of lexical items in New Guinea Pidgin. 『駒澤大学外国語論集』6 駒澤大学総合教育研究部外国語第1・第2部門 pp. 249-262.
- 紙村徹 (2012) 「村落住民の視座から見られた国家のイメージと言語問題——パプアニューギニア 東セピック州ワシクク丘陵クオマ族トングシェンプ村の事例から——」加藤隆浩編『ことばと国家のインターフェイス』行路社 pp. 101-142.
- 加藤隆浩編『ことばと国家のインターフェイス』大津：行路社.
- 崎山理 (1991) 「日本語の混合的特徴——オーストロネシア語族的要素について——」大林太良 / 佐々木高明編『日本文化の源流——北からの道・南からの道』東京：小学館 pp. 227-278.
- 崎山理 (2003) 「メラネシア・ピジン語の成熟と言葉遊びの発展」『月刊言語』32(2), pp. 48-55.
- 崎山理 (2003) 「太平洋地域における危機言語とその問題点」『消滅の危機に瀕した言語の研究の現状と課題』国立民族学博物館調査報告 39: 7-15.
- 杉本豊久 (2008) 「Tok Pisinのつづり字法・語彙・句表現——その単純化と合理性——」『成城イングリッシュモノグラフ』第40号 pp. 117-193.
- 諏訪淳一郎 (2005) 『ローカル歌謡の人類学——パプアニューギニア都市周辺村落における現代音楽の聴取と民衆意識——』弘前大学出版会.
- 高殿良博 (1988) 「多言語国家パプアニューギニアの共通語——トクピジンの発達とその可能性——」『アジア研究所紀要』15, pp. 248-229.
- 田中幸子 (1985) 「トク・ピシンの歴史と発達」『相山女学園大学研究論集』第16号 pp. 67-77.
- 田中幸子 (1986) 「トク・ピシンの「複文」に関する一考察」『相山女学園大学研究論集』第17号 pp. 77-86.
- 千田俊太郎 (2006) 「トク・ピシンの表記に関する考察」塩原朝子、児玉茂昭編著『表記の習慣のない言語の表記』東京外国語大学アジア・アフリカ言語研究所 pp. 273-302.

- 豊田由貴夫 (2000) 「メラネシア・ピジンと植民地主義」 吉岡政徳・林勲男編『オセアニア近代史の人類学的研究』(国立民族学博物館研究報告別冊第21巻) pp. 151-173.
- 中尾 茉裕 (2010) 「ピジン英語の現状と今後の課題」 立教大学『英米文学』70号 pp. 81-117.
- 中野道雄 (1976) 「ニューギニア・ピジンの輪郭」『神戸外大論叢』神戸市外国語大学創立30周年記念特集27 pp. 43-63.
- 中野道雄 (1977) 「ニューギニア・ピジンの類型」『外国学研究』IV, 神戸市外国語大学研究所 pp. 149-167.
- 中野道雄 (1990) 「トク・ピシン7つの試練」『神戸外大論叢』41 pp. 97-121.
- 野瀬昌彦 (2008) 「クレオールの世界言語学的考察：特にトク・ピシンとビスラマの状況」『麗澤大学紀要』第87号 pp. 91-113.
- Nose, Masahiko. (2011) Reduplication in Tok Pisin: Forms, Functions and Usages: *Asian and African Languages and Linguistics*, No. 6, pp. 61-70.
- McElhanon, K. A. (ed.) (1975) *Tok Pisin I Go We?* Kivung Special Publication 1, Port Moresby: Linguistic Society of Papua New Guinea.
- 橋本萬太郎 (1985) 「現代の言語研究の根幹にかかわるピジン・クレオール現象」『月刊言語』vol.14 no.11, pp. 80-81.
- 林正寛 (1981) 「「ピジン」の語源をめぐって (1)」『一橋研究』6(3), 151-160.
- 林正寛 (1981) 「「ピジン」の語源をめぐって (2)」『一橋研究』6(4), 159-170.
- 林正寛 (1987) 「ピジン・クレオール研究略史」『一橋論叢』98(1), 97-114.
- 福田薫 (2004) 「トク・ピジンの連続動詞構文再考——多重連続の問題——」『函館英文学』43号 pp. 21-31.
- 増田博邦 (1998) 「クリオール言語学の興起」『月刊言語』通巻318号(3) pp. 89-96.
- 松本和子 (2013) 「パラオ日本語の語用論的変異と変化」岡村徹 / Apoi Yaraepa (編)『オセアニアの言語的世界』pp. 220-262, 溪水社.
- 宮一郎・中野道雄 (1980) 「ニューギニア・ピジンの文法と語彙」『外国学研究X』pp. 1-107, 神戸市外国語大学外国学研究所.
- 森住衛 (1989) 「国際補助語としての英語教育からみたトク・ピシンとエスペラントの簡潔性」『大妻女子大学文学部紀要』21号 pp. 51-74.
- Mühlhäusler, Peter. (1975) "Reduplication and Repetition in New Guinea Pidgin." In McElhanon (ed.) pp. 198-214.
- 吉田信介 (2005) 「パプアニューギニアにおける言語教育」『立命館産業社会論集』第40巻第4号 pp. 143-158.